

ジャズ・ギターの系譜が語られる時、通常、真っ先にあげられるのは、ビ・バップのイディオムを駆使し、アンプをとおしたギター・ソロをフィーチャーしたチャーリー・クリスチンの演奏だ。それ以前に、そうしたギター・プレイはなく、ジャズにおいてはクリスチンを起点として、ギターという楽器に新たな認識が起こったとされている。クリスチンの登場によって、ギターはリズムを刻むだけでなく、ソロ楽器として認知され、多くのフォロワーを生んだというのがその理由だ。さらにクリスチンが評価されるのは、ベニー・グッドマンのセクステットに在籍した30年代末から数年の間、スウィングのイディオムから自在に逸脱してみせたことだった。クリスチンのプレイは、ビ・バップの先駆者としても認識されている。しかし、ある意味でこうした認識は、スウィング、ビ・バップ、そしていわゆるモダン・ジャズへと発展していくジャズ史のサイドから見た、いわば拙劣的な見方のような気もする。つまり、音楽が高度に発展を遂げていくことが約束されていた時代の認識のようにも思う。新しい音楽であればあるほど、過去の音楽よりも優位に立つことができた、幸福な時代、ジャズ・ヒストリーの中であまりに個性的なジャンゴ・ラインハルトへの評価は、そんな状況の下、くすぶり続けていた。

耳をそば立てずにはいられない、情熱的なプレイ。一度聴いたら忘れられない（本当！）、急速の印象的なフレージング。当時のアメリカのミュージシャンはまず手にしなかった、ラウンド・ホールのセルマー（マカフェリ）製アコースティック・ギター。バイオリンとリズム・ギターをバックにした、弦楽器のみの編成。ジャンゴ・ラインハルトの音楽には、アメリカのジャズからすれば、異形と言ってもいい多くの、しかも際立った特色があり、またそれゆえに、ジャズのメインストリームから距離を保ったところで輝いていたとも言える。何よりもジャンゴはフランスの、それもジプシー出身のギタリストなのだ。

ウディ・アレンが監督した近作「ギター弾きの恋」は、ジャンゴ・ラインハルトに魅せられ、自分こそはジャンゴに次ぐ存在と豪語するギタリスト、エメット・レイ（もちろん架空の人物）の半生を描いたものだったけれど、裏を返せばこれはジャンゴの音楽へのトリビュート映画と言っている内容だった。ショーン・ベン扮するレイが、明らかにジャンゴとわかるスタイルで演奏するシーンがふんだんに盛り込まれるのだが（実際の演奏はハワード・アルデンが弾いているが、ジャンゴの音源もいくつか挿入される）、これほどジャンゴの音楽が魅力的に描写された映画というのはこれまでになかったと思う。しかも主人公レイの性格、性癖にいたるまでジャンゴを模したと思われる設定。確かに、音楽自体がひと巡りもふた巡りもしてしまっただけのある今の時代、ジャンゴの音楽がとりわけ新鮮なギター・ミュージックとして映る

のは、当然のことのようにも思える。

## 伝説の始まり

出生年からして諸説があるが、とりあえず一般的な1910年説をとっておこう。とにかく、ジャンゴ・ラインハルトは伝説の多いギタリストだ。同年1月23日、ジャンゴはベルギー、ブリュッセルのジプシー一家に生まれた。母親はダンサー兼歌手で、ジャンゴは少年時代をジプシー・キャラバンとともにヨーロッパ各地を旅して過ごす。12歳でバイオリン、バンジョー、ギターなど各種弦楽器を巧みに弾きこなすようになり、パリで演奏活動を開始。しかし18歳の時、キャラバンで起こった火事を消そうとして、左手に大やけどを負ってしまう。以来、その後遺症でジャンゴの左手の薬指と小指は動かなくなり、彼は残った指で独自のフィンガリングを編み出したのだった。つまり親指、人差し指、中指の3本だ。親指はギターのネックの裏側で他の指の運指をサポートするのが普通だが、ジャンゴの場合は低音弦をネックの上部から押さえるためにも機能している。ちなみにチューニングはレギュラーのまま。こうした制約のあるフィンガリングが、独特のフレージングと和声感覚、そして幾妙なスウィング・ビートを生み出したことは確かだろう。

1924年にバンジョー奏者として初レコーディング。31年頃からおもにギターを弾くようになり、この年の暮れに出会ったのが、バイオリン奏者のステファン・グラッペリだった。33年、同じホテルに出演していたジャンゴとグラッペリは、楽屋でジャム・セッションを楽しむようになっている。ギターとバイオリンの組み合わせと言えば、アメリカではエディ・ラングとジョー・ウェヌーティのコンビが知られていたが、ちょうどこの年、エディ・ラングは31歳の若さで亡くなっている。

ジャンゴとグラッペリのセッションには、やがてジャンゴの弟のジョセフがリズム・ギター、ベースにルイ・ヴィオラが加わり、さらにもうひとりリズム・ギターを加入させて、ギターとバイオリンをフロントに立てた、弦楽器による独創的なスウィング・ジャズ・コンボが誕生する。34年に活動を開始したこのコンボは、フランスのジャズ評論家、ユーク・バナシェが主宰していた藍賞クラブの名を冠して、フランス・ホット・クラブ5重奏団（le Quintette du Hot Club de France）と名乗るようになり、39年の半ばまでの足かけ5年間、ヨーロッパ中で人気を博した。弦楽器のみによるスウィング・コンボというスタイルは、もちろんアメリカにも例がなかったけれど、ジャンゴはスウィングのイディオムに、ジプシーのフラメンコを思わせる激しいリックをふんだんに盛り込み、また優美で流麗なグラッペリのバイオリンやリズム・ギターの明確なリズム・フィギュアに支えられたスウィング・コンボのサウンドは、アメリカのそ

れとはまったく別種の美学を生んでいた。

## 念願のアメリカ公演、そして……

しかし根っからのジプシー気質を持つジャンゴには、トラブルが絶えなかった。有名になってからもパリの郊外のジプシー村に住んで派手な服装を好み、無免許で愛車を乗り回したり、ビリヤードや魚釣りに夢中になって開演時間に遅れたりすることは日常茶飯事だった。のらには気分が乗らないと公演をすっばかすこともあったようだ。レギュラー出演していたクラブで、司会者がグラッペリの名を先に紹介したことに腹を立て、その後1週間、メンバーと一切口をきかなかった。さらに39年、この気まぐれが、演奏旅行中のロンドンでグラッペリとの別れをもたらす。イギリスとドイツが開戦寸前になったのを理由に、ジャンゴは単独でさっさとフランスに帰国してしまったのだ。やがてパリがドイツ軍に占領されたため、終戦になるまでグラッペリとの仲は復活しなかった。

しかし占領下のパリで、ジャンゴの名声はさらに高まり、終戦後の46年には念願のアメリカ公演に赴くことになる。それまでコールマン・ホークスやベニー・カーターら、渡欧していたアメリカのジャズ・ミュージシャンとのレコーディングや共演はあったが、アメリカでの演奏はジャンゴの夢でもあり、しかもデューク・エリントン楽団のツアーに特別ゲストとして招かれるという、願ってもないお膳立てが出来上がっていた。エリントンはかつてロニー・ジョンソンのギター・プレイをフィーチャーしたことがあり、ギターに関して特にその有効性を感じていたと思える人物だ。

さて、東部と中部を巡演したこのツアーは大成功で、いよいよニューヨーク、カーネギー・ホールでの最終公演ということになったのだが、ここでジャンゴは自分の出番に30分も遅刻するという失態を演じてしまった。このために記者や批評家から良い反応が得られず、ジャンゴのアメリカ公演は彼の演奏に見合う評価が得られずじまいだった。ジャンゴは翌年初頭までアメリカに滞在したが、英語もままならない気まぐれなジプシー・ギタリストという印象は拭えず、結局はアメリカでの生活に失望してパリに帰っていったのだった。

独創的であり、しかも優れた演奏にも関わらず、アメリカでのジャンゴの評価が今ひとつだったのは、すでに40年代前半は過ぎてビ・バップの時代に突入しており、スウィングは時代遅れとの認識が生まれつつあったことも関係しただろう。ヨーロッパでも50年前後を境に、ジャズ・シーンは様変わり始めていた。ブライドの高いジャンゴが新しいイディオムを取り入れるはずもなく、彼は一時、演奏に興味を失っていた。しかしジャンゴは次第に円熟味を発揮する演奏を聴かせるようになり、これには再び評価が集まっている。しかしこれが彼の最後の輝きとなった。53年2月、フ